

議事要旨

会議名	令和5年度第2回板橋区環境教育推進協議会
開催日時	令和6年2月21日（水） 午前10時～正午
開催場所	大会議室B
出席者	<p>【委員 18名】（敬称略） 小澤委員、幸田委員、藤森委員、岩本委員、高田委員、増淵委員、石川委員、中田委員、 奥積委員、山田委員、森木委員、秋庭委員、バニヤ委員、磯崎委員、岡部委員、 市之瀬委員、奥泉委員、岩田委員</p> <p>【事務局 9名】 環境政策課長、スマートシティ・環境政策係1名、係環境教育係4名、資源循環推進課 長、指導主事1名、エコポリスセンター館長</p>
会議の公開 （傍聴）	公開（傍聴できる）
傍聴者数	1人
次第	<p>1 開会</p> <p>2 議事 （1）専門部会の活動報告 （2）次期環境基本計画の基本方針について</p> <p>3 閉会</p>
配付資料	<p>資料1 板橋区環境教育推進協議会委員名簿</p> <p>資料2 令和5年度板橋区環境教育実践研究部会活動報告</p> <p>資料3 環境教育実践報告書（資料3-1～4）</p> <p>資料4 （仮称）板橋区環境基本計画2035の基本方針について（資料4-1～2）</p>
所管課	<p>資源環境部環境政策課環境教育係 （電話：3579-2233）</p>

<p>審議状況</p>	<p>1 開会</p> <p>座長の小澤委員より、開会の宣言が行われた。</p>
	<p>2 議事</p> <p>(1) 専門部会の活動報告</p> <p>環境教育実践研究部会長の岡部委員より、資料2及び3について説明が行われた。また、実際の活動の様子を収めた動画を一部（保育園及び中学校）視聴した。</p> <p>市之瀬委員及び森木委員より、机上配付された参考資料を基に、自身の学校及び団体が実施した取り組みについて説明が行われた。</p> <p>－質疑応答－</p> <p>(小澤委員)</p> <p>(動画を視聴して) 保育園では園児の能力や保育士とのやり取りのレベルが高かった。知識伝達型ではなく、対話を重視していた。</p> <p>あいキッズは年齢幅があるのに対し、今回視聴した動画は、対象者年齢が統一されているため、プログラムを実施しやすいと感じた。</p> <p>(山田委員)</p> <p>市之瀬委員より説明のあった小学校での取り組みには自身も参加した。今の子どもたちは、昔と比べて自然の中で遊べる場が少なく、地域の自然環境に目を向ける機会も少ないと感じる。身近な木々に愛着が持てる上記小学校での取り組みは、そのような子どもたちにとって効果的で面白い活動であった。</p> <p>(磯崎委員)</p> <p>専門部会の活動は、今後さらに広げていくものなのか。また、どのような立ち位置として機能しているのか。</p> <p>(事務局)</p> <p>区としては、保幼小中全体で普及させていく目標がある。今後も毎年実施を重ね、環境教育の裾野を広げていく予定である。</p> <p>(磯崎委員)</p> <p>現在は一部の現場で実施しているが、段階的にブラッシュアップさせながら普及させていくということか。</p> <p>(事務局)</p> <p>それぞれの教育現場での事情により、受け入れ態勢が難しい場合もあるため、今後の展開の仕方等について研究しながら進めていく。</p> <p>(岡部委員)</p> <p>中学校では、様々な科目の中で日常的に環境教育を実施している。各教育の現場でもともと実施しているものを、このプログラム実践によりさらにアップデートさせていくことが主なねらいであると認識している。</p> <p>(小澤委員)</p> <p>良い取り組みを公開周知し、質の高い実践、啓発活動をあらゆる場面で広め、地域全体で共有していくことが重要である。</p>

あいキッズは利用者年齢の幅が広く、展開の仕方が難しいのが課題である。

(秋庭委員)

(動画を視聴して) 保育園の園児は、活動を通してごみを捨ててはいけないことを理解しているのに対し、実際にごみを捨てているのが大抵は大人である事実を残念に思う。

(エコポリスセンターが実施しているイベント「環境なんでも見本市」を紹介して) 様々な主体が出展する機会を活用し、相互連携を深めてほしい。

(幸田委員)

(市之瀬委員の説明に対して) 学校と企業の連携例は、共有し合う取組みとして大いに効果的である。「気づき」は何歳になってもあるため、様々な立場の人同士が関わり合い、常に学び合っていくことが大切である。

(小澤委員)

(動画を視聴して) 園庭や公園を中心とした活動の中で「海のごみ」に意識が行く園児がいたことから、保育園以外での日頃の経験が活かされていることが分かる。海のごみへの気づきは、海外のごみ事情への理解のきっかけとなる。このような経験によって思考回路を深め、進化させていくことが重要。

(奥積委員)

資料3-3の実践報告書より「秋が見つけにくい」は重要な視点である。春秋の暑い日が増え、季節感が薄れていくことに気づくのは大切なことである。

(増淵委員)

環境教育実践後のふりかえりは行っているのか。

(岡部委員)

毎年度末、各学校において環境教育に限らず行っている。

(2) 次期環境基本計画の基本方針について

事務局より、資料4について説明が行われた。

—質疑応答—

(磯崎委員)

日本人は、国際情勢に意識的に目を向ける機会が少ないと思う。温暖化問題の根本原因は「グローバル化」でもあるため、国際情勢にも着目して計画を検討した方が良いと思う。

(事務局)

現代の国際情勢の動向を把握しつつ、関係する会議体において示していきながら計画に盛り込んでいくことを検討していきたい。

(藤森委員)

環境教育を推進する場合、どれくらいの人に知識理解があるのかが見えていないといけない。環境問題に関心がある層とない層との差がある以上、同じプログラムを提供しても効果が変わってくる。具体的にどの層に向けて教育を推進していくべきかを精査しきれていないのは課題である。

(岩本委員)

計画の内容には、カタカナ語が多用されているが、日本語と英語のニュアンスの差異により、間違った捉え方をされることが懸念される。

国内外の動きを横断できるような、学び合いのプラットフォームづくりを進め、あらゆる世代が環境を通して関わり合うことが重要である。

資料4-2(2)のタイトルについて「対応」と表記されている箇所があるが、「適応」に修正した方が良い。

単にプラスチックを減らすことを目標にするだけでなく、バイオプラスチックを選ぶなど、消費者が素材選びに配慮するように促す視点も必要である。

(幸田委員)

計画を見直すにあたり、今後もより多くの方が参加していくべきである。資源環境審議会も含め、どのような立場の人が環境について議論しているのかが見えると、周りの人々の意識アップにつながるのではないかと思う。

板橋ならではの環境計画を作り上げていくためには、様々な立場の区民の参加が不可欠である。ブレインストーミングの機会を大切にしていきたい。

(事務局)

区がどのようなカラーで発信していくかということは、区民に分かりやすくイメージしてもらおうと大事な視点であると考えている。区民参加についても、ワークショップ等の機会を活かしながら、様々なアイデアを取り込んでいきたい。

(森木委員)

資料4-2(6)については、様々なステークホルダーと関わる旨を明記する等、より具体的に記載した方が良い。

本計画はゼロカーボンいたばし 2050 に向けての「移行計画」としての位置づけであり、目標値を明確に設定し、それを実現するための道筋を具体的に立てていくこと(バックキャスト)が重要である。

複数の計画を「一体的に統合」することは難しいのではないか。どのようにかみ砕いて一つの計画に落とし込んでいくのか。

(事務局)

パートナーシップの重要性や、複数の計画を統合した際の表現は分かりやすくまとめる必要があると考えており、他の自治体の作成例等も参考にしながら検討していきたい。

(小澤委員)

計画の内容を示す際には、図やイラストを交えながら概要をまとめ、分かりやすく表現すべきである。

(中田委員)

現在の基本計画の目標がどれだけ達成できているのか検証する必要がある。また、どれだけ新しい課題との乖離が生まれているのかを検討しなければ、なぜ目的が変わるのか説明できないのではないか。

現在の基本計画において、「年間ごとの達成度推移」「自ら環境保全のために行動する人」「次世代を育成する指導者」はどのように推移してきたか。

次期計画に向けては、どの点が引き継がれて、どの点を引き継がないとしているのか。
(事務局)

進捗の総括については、指標のあり方についてもご意見等をいただいているため、今後も丁寧に進捗状況を管理・分析していきたい。

(奥積委員)

昨今の経済は、国家間・企業間の競争となってきたため、自国や地域の産業を環境面から守るにはどうしていけばよいかを考えてもらいたい。

(事務局)

区で実際に行っている電気自動車や太陽光パネル等についても、産業的な状況を常にとらえながら、計画の策定を進めていきたい。

(石川委員)

計画内には様々な「名称」や「フレーズ」の記載があるため、何が重要なのが分かりづらい。掲げる目標を一言で言い表せるようなキャッチフレーズを検討するべきである。

(事務局)

区民が具体的にイメージできるようなキャッチフレーズを、引き続き検討していきたい。

(増淵委員)

環境教育により、意識がどう変わったかを評価することが重要だが、その状況把握が十分にできていないように感じる。

エコポリスセンターが実施している環境イベント「環境なんでも見本市」は、様々な主体が自らの取組みを紹介し、交流できる機会だが、20年以上続けている割には認知度が低く、もったいないと感じている。

(事務局)

環境教育による区民の意識変容を状況把握は、未だ万全ではないと認識している。エコポリスセンターでのイベント等と合わせて、参加者の環境意識をより詳細に追跡していき、具体的な状況把握に努めていきたい。

(高田委員)

計画内の名称等にカタカナ語が多用されていると理解が難しいのではないかと思う。日本人の感覚に合うよう、表現の仕方に配慮した方が良いのではないか。

(事務局)

計画内の様々な名称については、その意味を区民が十分に理解できるための方策を引き続き検討していきたい。

(小澤委員)

(「ごみを減らす」という目標について) 一人ひとりの環境意識が高まれば、自然にごみは減っていくもの。主体的に行動を起こさせる工夫が必要である。

(バニヤ委員)

一人ひとりが環境に配慮した行動を取っていくためには、あらゆる世代や立場の人々の意識を満遍なく高めていくことが重要である。環境啓発や学習等の取組みは、外国人向けプログラムがあっても良いと思う。

(事務局)

環境教育をより効果的に広めていくために、どのような層をターゲットにして事業を提供していくかということを十分に意識して取り組んでいきたい。

(山田委員)

資料4-2(3)については、タイトルをカタカナ語にせずに、「ごみを減らす」といった簡潔な表現にした方が分かりやすいのではないか。タイトルやキャッチフレーズは、分かりやすく親しみがある方が良いと考える。

(事務局)

「ごみを減らす」といった内容計画の中に盛り込んでいるが、現在一部分かりづらい表記になっているため、今後の計画策定作業の中で検討していきたい。

(小澤委員)

「モノ」を作ると必ず寿命が来る。生産する段階で廃棄について考える感覚が大切である。環境を学び続ける中で触れる様々な概念を大切にしていく必要がある。

5 閉会

座長の小澤委員より、閉会の宣言が行われた。